

リービ英雄論：喪失としての不在と非在

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2020-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 松浦, 光汰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027099

リービ英雄論

—喪失としての不在と非在—

南 富 鎮・松 浦 光 汰

1 はじめに

近年にわかに越境文学というジャンルが注目を受けている。簡単に言えば、旧来の国民国家文学の境界を越える行為を指すものである。日本で言えば日文学がそうであり、外国人作家の作品はその典型的な例になるかもしれない。あるいは多和田葉子のように在外において異文化的な発信する作家たちもこれに属するかもしれない。こうした越境行為にはたんに異文化の紹介や自己の存在葛藤だけではなく、その根底を流れている大きな心的要素があるようにも思われる。その本体は喪失感ではないかというのが本論の趣旨となる。たんに自己アイデンティティの構築や増殖、追加や獲得ではなく、なにかを失われている心的過程が強く見られるように思われる。

これは越境文学作家自身が境界を越え、もしくは強制的に越えさせられた際に、なにかが壊され、なにかを失っているから発生しているのかもしれない。いわゆる越境文学というものに私小説の形態が多いのもこうした所以かもしれない。越境の根底には喪失があり、その喪失の根底には越境以前の自己がなんらかの形で破壊（あるいは分裂）されていく過程が想定されるのかもしれない。この越境とその心的原点である破壊という要素が強く現れている作家にリービ英雄がいる。多くの越境文学作家がいくつかに分裂した自己を修復し、一つのアイデンティティを求めていくが、リービはそれとは逆に破壊されたばらばらの状態をそのままにしている節がある。幼少期に破壊を根源とする喪失に襲われた経験を持つという点においてリービも他の越境文学作家と共通する側面を持っているが、その破壊されバラバラになった状態にこそアイデンティティを見出し、自らの内にルーツの無い言語において作品を生み出すという獲得の経験を持つ点において、きわめて特異である。

本論においては、リービの作品の中で境界の破壊と喪失の心性が強く現れて

いるいくつかの作品を分析し、喪失における不在と非在をもたらしたリービ英雄文学の境界について論じていく。

2 リービ英雄と境界

リービの作品の多くに共通する中心テーマは「境界」である。先行論も多くはこの点について注目をしている。ここではまず先行論を踏まえつつ、リービ英雄の「境界」について取り上げていく。

(1) 仮の水

この作品のタイトルにも使われている「仮」という言葉だが、作品を読み進めるにつれて日本語的な意味での「仮」ではなく、中国語の假（假）のニュアンスに近い「偽」のという意味で使われていることがわかる。また「仮」という言葉は真（本物）を暗示する。この前提を基に作品を分析していく。

主人公である「かれ」には標準中国語の素養がある。しかし旅行している中国の田舎では方言が標準として使われており、「かれ」には理解できない言葉が多い。そのため精神的に不安定な状態となっている。それを示すのが「部屋の外も部屋の中も、凧いだり荒れたりする方言の海、その中でかれはひとり黙り込んだ¹」という描写だ。近代社会において、標準語は圧倒的な優位性を持っており、方言は排除されるべきものとして扱われてきた。これは前者が「真」であり、後者が「仮」であると言い換えられる。しかし辺境においてこの力関係は、時として逆転する。そもそも標準中国語と方言の区別も1950～1960年代に定められたものである。これらの描写から「真」や「仮」というものは時代や場所が変われば変化するものだという考えが導き出せるかもしれない。

主人公が列車に乗っている際に仮票（偽乗車券）騒動が起きる。偽造した切符で列車に乗車する行為は犯罪である。この状況において、「仮」のものは悪である。

トイレで出会った老人の持っていた松葉杖を「かれ」は「仮の足」と表現した。老人は足が不自由なため、松葉杖を頼りにしている。本来であれば人間の体を支えるのは足である。そしてそれを補助する松葉杖が「仮の足」と表現されることは当然である。だが実際において松葉杖は「真」である足として扱わ

¹ リービ英雄『仮の水』（講談社、2008）

れている。ここでは「仮」の松葉杖が老人の「真」の足となっている。これも「真」と「仮」の逆転と言えるだろう。この状況では「仮」のものは善である。

観光に訪れた石門山にて「かれ」は仮道士という存在に出会う。仮道士は「道とはなにか？」という道士の問いに答えられなかった。そのため道士と共に山の境内に住むことを許されず、石の門の外で孤独に暮らしている。だからこそ仮（偽）道士なのである。道教の真理とされる「道」は各自が自分自身で見出さなくてはならない。だが道教を発展させた老子の言葉に「語りうる道は真の道ではない²」がある。これを基にすると「道とはなにか？」という問いを発しているこの道教集団が「仮」の存在として描写されている可能性がある。「かれ」が道士と話した際に「道士の髪束が、一瞬、頭から伸びた脳みその柱のようにも思えた。」という反応を見せている。「かれ」には道士が異様なものに見えたのではないだろうか。仮道士は「真」の道士であるにもかかわらず、「真」として描かれている「仮」の集団によって、「仮」の道士とされてしまっている可能性がある。

物語の終盤で「かれ」は祖先の情報求めて開封を訪れる。そこで「帰国した、ということばが、物静かな路地の中で克明に響いた。かれは少しずつ、ぞっとするような気分になった」という描写がある。帰国したユダヤ人たちと「かれ」の違いは母親がユダヤ人の血統を持つかどうかだけである。しかしその差が祖国を持つか持たないかという絶望的な隔たりを生じさせている。彼らを区別しているものは先天的な要素ではなく後天的に押し付けられた戒律である。「真」と「仮」の区別は人為的にもなされることが示されている。

このように純粋な正しさが存在しないような、「真」と「仮」が混在する世界の中で「かれ」は「我是」と呟く。これは作中で初めて自己を肯定するような言葉である。アイデンティティの確立と言えば一つの絶対的なものに見出すケースが多い。しかし「かれ」はむしろ混沌とした世界でこそ自己を肯定することに成功したのではないだろうか。

(2) 千々にくだけで

この小説は9.11が題材となっている。主人公であるエドワードは日本からカナダを経由してアメリカに渡ろうとしていたが、カナダに到着する直前に世界貿易ビルへのテロ攻撃が起こる。そして政府によってアメリカへの出入国が禁

² 福井康順・山崎宏・木村英一・酒井忠夫『道教』（株式会社平河出版、1983）

止されたことで足止めを食い、数日をカナダの地で過ごすことになる。このカナダという土地の描かれ方に注目したい。

空港における「エスカレーターを下りたとたんに、ごちゃ交ぜにされた黒髪と金髪と白髪の人だかりに押されて行った³」という描写は、アメリカの地で起こった破壊によって、遠く離れた地の境界も滅茶苦茶に破壊され、新しい空間が発生していることを示している。

この小説には通りの描写が多い。「アメリカのストリートとそっくりな横丁は、アメリカではない。不思議なところで夜を過ごすことになった。三千キロも国境がつづき、いつもアメリカが手に届きそうなこちら側は、アメリカとそっくりでアメリカではない」「ストリートは、京都の横丁のように細長くまっすぐに、だが右も左もガラスと茶色い大理石の建物を貫いて、先へ先へとつづいていた」「ゆるやかな勾配のアベニューと、それに交差するストリートは、すべて英語の名前だった。しかし、英語の声はなかった」これらの描写が示すように、カナダはアメリカと日本の要素がみられるものの、どちらでもない曖昧な土地として表象されている。これも境界が壊れかけている描写の一つだろう。

物語の序盤においてエドワードは周囲（日本人）から「こちらの人」と見なされなかったが、いつの間にかアメリカの家族はエドワードにとって境界の「向こうの人」となっている。そしてエドワード自身もアメリカ出身ではあるものの、もはやアメリカで暮らすことはできない境界のこちら側のものとして描かれている。元々一つであった家族の間に境界と亀裂が生じ始めている。

このように、「千々にくだけで」の中にも境界が入り乱され、亀裂が生じている描写を見出すことが出来る。

(3) 国民のうた

この作品は前半が日本に定住する主人公の里帰りを、後半が阿部公房のドキュメンタリー映画を撮影するための中国旅行を描いている。そしてどちらにも「家」というテーマが背景をなしている。この「家」は境界が破壊され入り混じった原点の場所である。

物語の冒頭において、主人公「かれ」はアメリカの実家に里帰りをする。そこには年老いた母と「かれ」の弟が二人で暮らしている。この弟は精神遅滞を患っており、ほとんど断片的にしか言葉を話すことが出来ない。作中において、

³ リービ英雄『千々にくだけで』（講談社、2005）

弟を含めた精神遅滞を患っている人物が発した言葉のみが英語もしくはローマ字で表記され、それ以外の人物全員の会話が日本語で書かれている点から、精神の正常と異常の境界が言語表記によっても示されている。境界の錯綜と混乱が言語表記の混乱をもたらす。しかし終盤部分において、精神遅滞の四十を過ぎた男が緑と金色の包み紙のプレゼントを四方に投げながら、「Take me home! Take me home!」と集会場の空気をつんざくような少年の声で叫んでいる場面に遭遇する⁴。この「家に帰りたい」という欲求は、「かれ」が少年時代に故郷だと思っていた家を追い出された時から持ち続けてきた欲求でもある。そして同様の欲求を物語の序盤に出てくる白人ホームレスも後半部分に出てくる阿部公房も持っている。つまりこの点においては誰もが失った時点から進んでいないということになる。一見異質なものであっても実際は共通している部分があり、そこに明確な境界があるわけではないことが示されている。

また家を形成する要素として家族以外に、家そのものが挙げられる。「かれ」はアメリカの母と弟が住む家に帰ったが、『いくら大人になっても「自分の家」という言葉を聞くと、少年時代に父と母と弟とラオ・シェと一緒に住んでいたその家しか思い浮かばない』という描写からわかるように、彼自身にとっての家は5歳から10歳までを過ごした台湾の家だった。台湾の家が『かれが眠りにつく前の夜の庭には、いくつかの方向からお互い通じ合っているとは思えない、二つ、三つ音階のまったく違った声と同時に流れ込んでくることもあった。夜の庭は、大人たちが口にする「大陸」のように、広大なところだった』と様々な要素が入り混じった空間として描かれているのに対し、両親が離婚した後に住み着いたアメリカの家は『父と母が離婚し、かれが、「日本人作的」家を去り、おぼろげな記憶しかなかったアメリカに「帰」ってから、そのアメリカの家の中でまず気になったのは、弟の葉の複雑な臭いだった。』と一つの強烈なものが支配している場所として描かれている。混在とは境界が混ざり合っている状態である。台湾の家はまさに境界が破壊された場所だと言える⁵。

以上のように、分析したどの作品においてもその世界の根底には境界が乱され曖昧になっている（ときには壊れている）場所がある。そしてそれが修復されるわけではなく、維持されているのがリービの文体の特徴だと言える。

⁴ リービ英雄『国民のうた』（講談社、1998）

⁵ この台湾の家を中心にリービを論じた笹沼俊暁は「リービ英雄の多くの作品世界に通底する移動や越境、アイデンティティ喪失のテーマは、そこから生成してくる」と分析した。笹沼俊暁「リービ英雄における台湾」（『文学研究論集』29号、筑波大学比較・理論文学会、2011）に所収。

3 リービ英雄と不在

このようなリービの特徴は何に起因するのだろうか。それを探る手掛かりとして、安岡章太郎の分析を紹介したい⁶。

安岡：あるいは僕はこう思いたいね。自然というよりノスタルジーだ。僕はリービさんの文章というか思想の中には、失われたものに対する愛着があると思うんだ。

リービ：ノスタルジーという言葉は余り好きじゃないけれども。

安岡：うん、それはあなたは老人じゃないからね。しかし、歩き廻るのが好きな人は必ず、うしろを振り返るもんだよ。僕は今度の『星条旗の間こえない部屋』を読んで本当に感動しましたけれども、それはなぜかといったら、やはりそこには失われたものへの感傷、哀愁があるんですよ。それは主題ではなくても、底流になっているモチーフなんですね。

安岡は、リービの文章の核には「失われたもの」があり、それに対する感傷や哀愁が作品を貫くテーマになっていると指摘している。失われたものとはつまり、かつては存在したが現在には存在しないもののことである。それは言い換えれば不在である。この不在という状態がリービに与えた影響は非常に大きいと考えられる。以下においては不在という言葉を中心に、リービの文学にみられる失われたものについて考察していく。

まず挙げられるものは、両親の離婚という親の不在だ。リービの作品の多くには離婚の描写がある。例えば、小説『天安門』においては、「少年時代に純金髪の髪だった母と、青年時代に継母となった黒髪の女の、二つの姿が交互に浮かんだ。そして、まるで彼の家族を破壊するためであるかのように⁷」という描写がある。主人公は成長過程において母が二人も存在し、それによって家族が「破壊」されたという認識を懐いている。青年時代の母である黒髪の女性とはミス・ジャオと言い、中国国民党派であったために家族と共に台湾へと渡ってきた人物で、父親の再婚相手でもある。当時のリービにとってミス・ジャオは自らの家族を破壊するような存在に思えたであろう。ミス・ジャオの存在によって以前の境界線は乱れ、少年時代の母親は失われ、不在となる。

⁶ 対談「喪失を書く文学」(『群像』48巻6号、講談社、1993年6月号)に所収。

⁷ リービ英雄『天安門』(講談社、1996)、52頁

離婚に付随するものとして、残された子供のアイデンティティの問題がある。発達心理学者であるエリクソンはアイデンティティについて次のように述べている。

以前の段階がアイデンティティの危機に残したものが、自分自身や他人への信頼を求める欲求という重要なものであるとするならば、青年は明らかに信頼しうる人間や観念をきわめて熱烈に求めることであろう。その人間や観念とは、その面前で自分が信頼に値するものであると証明することが価値があると考えられるようなものをも、同時に表している⁸

青年期の人間は、自らの存在を証明するために信頼出来る人物を欲するとエリクソンは指摘している。そして多くの場合においてその人物には家族も選ばれるという。最も信頼を寄せられる存在の一人である父親の喪失（離婚による分離）は、それがたとえ形式上のものとは言え、リービのアイデンティティに深刻な影響をもたらしたであろう。

リービにとって喪失は家族だけではない。リービはユダヤ人の血筋を持っているが、それは父親に因るものである。ユダヤ教においては母方の血筋がユダヤ人でなければユダヤ人として認められない⁹。母系中心なのである。そのため、リービはユダヤ人という枠組から疎外されている。父親が正真正銘のユダヤ人で、当然父親の母親（リービの祖母）はユダヤ人である。しかし、リービの父親はポーランド系アメリカ人女性と結婚し、後に中国人女性（韓国人と中国人のハーフである）と再婚したために、ユダヤ人としての純血主義に反するものとして疎外されている¹⁰。第一作である『星条旗の間えない部屋』（1992）には次のような描写がある。

両親の離婚のあとにとつぜん父方の祖母や伯父伯母やいとこからの便りが絶えた。ベンは母と二人でバージニア州に住みついた。高校一年生のニュー・ヨーク修学旅行中、最後の日に教師と同級生からこっそり抜け出し、一人で地下鉄の電話ボックスに入って、あらかじめ母から探り出していたブルックリンの祖母の電話番号をかけてみたことがあった。老婆のひ

⁸ エリクソン『アイデンティティ—青年の危機—』（岩瀬庸理訳、金沢文庫、1973）、168頁

⁹ A. ルスターホルツ『ユダヤ教—歴史・信仰・文化』（野口崇子訳、教文館、2015）

¹⁰ 注6に同じ

よわな「Hello」を聞いて、「It's Ben」と答えると、向こうからは沈黙が流れてきた。ウエスト4ストリート駅の薄暗い電話ボックスの中で濁った雨水のように増してくる沈黙に対して、「ジェイコブの息子のベンです、あなたの孫のベンです」というと、がちゃんと電話は切られた。ベンは十四歳だった¹¹

リービ英雄文学の底流に流れる根源的な喪失の一つであると言えよう。ユダヤ系血筋からの拒絶である。

ユダヤ人の民族的離散を示すDiasporaという言葉がある¹²。ユダヤ人は遙か古代より、流浪の生活を強いられてきた。パレスチナから始まる彼らの歴史は、様々な形で多くの文明史に刻まれている。現在のユダヤ人の多くは定住先を見つけており、リービの父親の一族はアメリカのブルックリンに根を張っている。ユダヤ一族に対してリービは現在でもなお自らの家を求めて移動の人生を続けている。追放された身であるリービこそがユダヤ人らしく思えるとは、なんとも皮肉なことであろう。

リービにとって故郷という言葉が示す場所は、五歳から十歳までの少年時代を過ごした台湾になる。小説『模範郷』(2016)はその台湾がテーマになっている。そこに描かれていた台湾の故郷の表象は、愛おしく温かい故郷というような甘いものではなく、混沌としたその後の人生を彷彿とさせるような、家というよりはむしろ境と表現すべきものであった。つまり、故郷は一般的な「ふるさと」ではなく、境界が設定された異質な空間というべき「模範郷」となるのである。

塙の外からは、ぼくにはわからない大人と子供の、遠い声とすぐ近くの声が、一日に何度となく、塙に囲まれた広い庭の中まで届いていた。「方言」であるとはぼくは知らなかった。家に入出入りする軍服姿の「国民党」の大人たちが話す「國語」と違って、塙の外の話し声は僕にはまったく分からなかった。そして大人たちには、わかる必要があるという態度はなかった¹³

当時のリービは英語しか理解できなかったため、聞こえてくる言語は意味が

¹¹ リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』(講談社、1992)、28-29頁

¹² アブラム・レオン・ザハル『ユダヤ人の歴史』(滝川義人訳、明石書店、2003)

¹³ リービ英雄『模範郷』(集英社、2016)、17頁

付随しない音声に過ぎず、それがむしろリービに強い印象を残しているように思われる¹⁴。意味ではなく音声（音）としての故郷とも言えるだろうか。それに比べ、五歳の時に台湾に引っ越してきたリービのアメリカの記憶（音）はおぼろげである。風景あるいは心像風景ではなく、音あるいは「心像音声」としての故郷なのである。ほぼリービ英雄によって初めて提示された根源的な問題¹⁵である。それが幸か不幸か自らの拠り所を決定づける大きな要因となったことは間違いない。この作品についての対談¹⁶でリービはこう語った。

たくさんの人から感想をもらって気付いたのは、現代人には皆「失われた家」の記憶があるということでした。それは田舎の家だったり、今いるマンションの前に住んでいた東京の家だったりするんだけど、現実から消えたもう一つの家を、心のなかにもっている。僕の場合はいろいろな要素が入って、いわゆる国際的になってしまったんですが、「模範郷」のコアにあるものは、何かの理由で五歳から十歳までいた家を失ったことです。失った後、四十になっても、五十になっても、六十になっても、それを忘れることはできない

リービが故郷として呼ぶ模範郷は日本人が建てた町だった。周囲には異言語（台湾語）の音声絶えず聞こえる郷であった。リービ英雄一家はそこに移り住むが、そうした状況は変わらない。異言語の音声に取り囲まれた特殊（模範的？）な空間が存在し、リービは以前の日本人同様、「よその」の存在であった。そしてリービは両親が離婚したことによって、そこを追い出されてしまう。親の喪失と同時にリービは故郷も喪失したのである。それは音の消失であり、不在でもある。不在とはつまり、自分の一部が壊されて消えてしまうことに他ならない。リービの破壊の原点は、まぎれもなく音としての故郷であった。

取り戻すことが叶わない喪失経験と、それに対する行き場のない感情がリービの文学を形作っていると言えるだろう。

¹⁴ リービは「子供だから何が母語か何が外国語かという区別がほとんどなく、もちろん自分の言葉ではないんだけど、母語のように聞こえて、その記憶がどこかに眠っていた」と述べている。対談「中国、そして現代文学へ」（『群像』61巻8号、講談社、2006年8月号）に所収。

¹⁵ リービが聴覚的な「音声」に執着している例として、『星条旗が聞こえない部屋』や『国民のうた』などの題目からも窺える。

¹⁶ 対談「『模範郷』を読む」（『世界』岩波書店、2016年10月号）に所収。

4 リービ英雄と非在

リービの第一作「星条旗の聞こえない部屋」(1987)は、アメリカ人が自らの意思で日本語を選び、創作を始めたということで日本文学界に衝撃を与えた。文学とは言語を綴る作業であり、その言語は国家や民族と密接に結びついている。国民国家に支えられた日本近代文学は書き手を基本的に日本人として想定しているが、実際においては外国人が日本語で創作をするケースも多く存在している。やむを得ず日本語で表現する人々の存在である。いわゆる在日文学がそうであり、台湾人作家の日本語創作においてもそうした要素が見受けられる¹⁷。いずれも以前の植民地期文学が残した日本語文学であるが、それらは強い負の歴史性を帯びている。いけば歴史によって呪縛された言語(日本語)という認識である¹⁸。しかし、リービの場合はこれとは異なり、日本語を強いられた立場の人間ではなかった。日本語はリービのルーツ(自我形成)に深く関わっておらず、むしろ非在のものだったとは言えないだろうか。この非在のものを新たに獲得する過程で、リービは日本語の境界線を揺るがしているようにも思われる。

戦後文学において本多秋五が解放¹⁹を述べ、江藤淳が喪失感²⁰を打ち出しているが、これらの背景をなすものは言うまでもなくアメリカの存在である。小島信夫の『抱擁家族』(1965)、『アメリカン・スクール』(1955)などはそうした典型例であるが、そこには否定しがたい上下意識がにじみ出ている。いわゆる「アメリカの影」なるものである。それが逆にアメリカによる日本表象の幼児的なエキゾチシズムを助長する原因にもなる²¹。リービ自身、「お前が書けばこれは単なるエキゾチシズム」。小泉八雲から百年ずっと続いていた、白人の特権的なオリエンタリズムでしか書いてないんじゃないか、と言われることを何よりも恐れていました²²と述べているのもこうした機微の現れであろう。リービの試みが「単なるエキゾチシズム」や「特権的なオリエンタリズム」であるかど

¹⁷ 呉濁流の『アジアの孤児』(1956)がそのよい例である。

¹⁸ 金石範『ことばの呪縛』(1972)などにおける日本語認識はそうした典型的な例となるであろう。

¹⁹ 本多秋吾『物語戦後文学史(全)』(新潮社、1966)

²⁰ 江藤淳『文学と私・戦後と私』(新潮社、1974)

²¹ 日本語で表現したいというリービの欲求に対して周囲は「せっかくアメリカ人に生まれたのに、なぜそのような周縁の国の言葉に惹かれるのか」と西洋中心主義的な見方でほとんど軽蔑のような態度をとった。対談「危機の時代と『言葉の病』」(『世界』岩波書店、2016年1月号)に所収。

²² 対談「なぜ日本語で書くか」(『文学界』71号11巻、文藝春秋、2017年11月号)に所収。

うかの判断は保留するが、その等身大の日本語は多くの賞賛²³を浴びて日本文学界に受け入れられた。

日本語の獲得は決して容易なことではなかつたろう。ここで注目したいのは、リービにとって日本語は自己の構成要素ではなく、一切のルーツを内包しない事象だった点だ。この要素がリービと他の日本語文学作家²⁴、そして日本語ネイティブを明確に区別するのである。

いわゆるネイティブと呼ばれる人間は母語に対する優越性を持っている。リービと親交を持つドイツ語作家の多和田葉子は著作『地球にちりばめられて』(2018)にて「ネイティブは魂と言語がぴったり一致していると信じている人たちがいる。母語は生まれた時から脳に埋め込まれていると信じている人もまだいる。そんなのはもちろん、科学の隠れ蓑さえ着ていない迷信だ²⁵」と批判した。このような優越性の根底には、ある言語を持つ者と持たないものの間には何らかの差があるという意識があるのではないだろうか。

とくに日本人には、このような意識がアイデンティティのような形で現れているケースが多い。リービは日本語を学ぶ際にかなりの疎外感を覚えたようだ²⁶。文芸評論家の永岡杜人は近代国家のイデオロギーにその要因を見出した。永岡は次のように考察する。

西洋の「文明」を摂取してつくられた「近代日本」は、思想や制度、文化は積極的に受け入れたが、一つだけ決して受け入れなかったものがある。それは「人」である。国籍、言語、民族、文化、この四つが強く結びついているという確信のもとに、「日本人」というカテゴリーが形成され、「外」から来たものは「外人」として排除されてきた²⁷

²³ 青木保はリービの文章を次のように絶賛した。「リービさんの文体は素晴らしくて、とくに、文章の間の取り方というか、呼吸のとり方が独特のもので、他の現代日本文学には見られない。言葉と言葉の間に動きが感じられます。万葉集や芭蕉から来る、日本文学の伝統を引き継ぎ、それが現代に生かされている」。対談「異言語体験と『文学の力』」(『中央公論』121巻7号、中央公論新社、2006年7月号、176-188頁)に所収。

²⁴ 日本語を母語とするものを「日本文学作家」、日本語を母語としないものを「日本語文学作家」と区別している。

²⁵ 多和田葉子『地球にちりばめられて』(講談社、2018)

²⁶ リービは「自分自身の出発点においては、読んでもいいけど書くな、と同時に翻訳してくれという依頼が、自分のキャリアを危なくも形成しようとしていた」と述べている。対談「越境する文学」(『群像』49巻11号、講談社、1994年11月号)に所収。

²⁷ 永岡杜人「言語についての小説—リービ英雄論」(『群像』64巻9号、講談社、2009年6月号)に所収。

海によって明確に内と外が区切られている地理的要因に加え、近代国家の成立に不可欠なイデオロギーが、この閉じた日本語を作り出したのではないだろうか。

このような母語とアイデンティティの関係にはある問題が存在している。例えば柄谷行人は母語習得の過程について次のように分析した。

しかし、ある言語を、本人が選ぶわけじゃないけれども、とにかくある言語を習得すれば他の言語に対する習得能力を失うという関係にある。ある言語を習得したということは偶然的なことですよ。しかし、それが絶対的な必然に転化されてしまうわけです。つまり、外面的な関係が内在化されてしまって「内なる言語」になる。しかし、内的な言語というのは外的な言語の内在化したものだと思うんです。だから、たまたまそこにいれば、その言語を内面化して自分の思想そのものができ上がってくるわけでしょう。つまり、そここのところの偶然性と言いますか外面性と言いますか、それをもっと見つめた方がいいとぼくは言いたい²⁸

要するに、母語の習得という過程は、基本的にその言語空間で生活するという絶対的な呪縛であるにも拘らず、全く自己の意思が加味されない偶然の出来事だと柄谷は述べている。このような母語習得の過程を柄谷は暴力と表現した。我々は母語を選んだわけではなく、強制的に選ばされたのである。自己の根幹をなし、最も自由に操れるはずの言語が不自由な形で習得されるという矛盾である。根本に矛盾を抱えているからこそネイティブは母語というものにアイデンティティを見出し、正当化しようとするのかもしれない。

それに対して自らの意思で獲得したリービの日本語は我々のものとは根本的に異なるものの可能性がある。その根底には「在る」ものへの渴望が流れている。自己の欠落を埋めようとする執念が、リービを日本語に駆り立てたのだろう。

リービは多和田葉子との対談²⁹において「日本語を書く部屋は、必ずしも日本にある必要はないのかと思うようになりました」と述べている。リービの文学は国籍、民族、言語、文化がイコールでつながっているという幻想を破壊した。極めて狭い範囲に引かれていた近代日本語の境界が乱され、リービによっ

²⁸ 特別対談「日本語で書くことの意味」(『文学界』42巻9号、文藝春秋、1998年9月号)に所収。

²⁹ 対談「越境とエクソフォニーのいま」(『すばる』41巻1号、集英社、2018年12月号)に所収。

てより広い範囲に再設定されようとしている。

5 不在と非在

以上の分析において、リービの特徴的な文体の要因には不在と非在があると論じてきたが、総じていえば、リービは非在を用いて不在を描いていると言える。不在とは自らの内側にあったものが外側に出てしまうことを意味し、その中心は自己にある。しかし非在は自らの内側にその要素を最初から持ち得ていない状態である。自己が中心ではなく外側に存在しているからである。この二つはかけ離れた事象のように思える。このような異なる二つのものについてリービと沼野允義は対談において次のように語った。

リービ：そこで簡単に二十一世紀を振り返ると、文学を書くということは、一つの共同体、一つの文化を一つの言葉のなかで書くということなのか、それとも、ぼくはよく「越境」というキーワードを使っているんですが、一つの文化ともう一つの文化とのあいだの動き、極端に言うとバイリンガルに近い感覚で書くということなのか、現代文学にはこの二つのモデルが混在している。そして後者は非常に「新しい」と考えられているわけです。しかし、この二つは違うように見えて似ているところもある。一つの小さな共同体を書いていても、その共同体が世界や外部に通じていて、そこから文学の力が湧き出るといことがありますから。

沼野：まさに文学とはこうあるべきだという一つの正しい答えがあるわけではなくて、二つのかなり違うモデルが混在している。むしろぶつかり合っているような気がするんですね。越境していく、あるいはどんどん普遍的なものにひろがっていく遠心力的なもの、その一方で狭い共同体のなかに収斂していく求心的なものがある³⁰

要するに、かけ離れているように思える事柄にも共通する部分があり、それらは決して明確な境界線で区切られているわけではなく、混在しているものだと両者は述べている。これは逆の内容を示す不在と非在にも当てはまるのではないだろうか。過去には存在していたが、現在には存在していない不在はやが

³⁰ 座談会「文学はどこへ向かうか」(『週刊朝日百科・世界の文学』134巻9号、朝日新聞社、2001年11月号)に所収。

て「喪失」へと変化する。そして「喪失」による欠落を埋めるために個体は非在へと駆り立てられる。つまり、不在と非在は一本の線につながっているのである。「喪失」を中心にした不在経験と非在獲得が、リービの文章を形作っているのではないだろうか。

安岡章太郎はこの「喪失」が文学に欠かせないと指摘する。

安岡：僕は、繰り返しになるけれども、やっぱり「若者よ、しっかりしてくれ」といいたいね。(笑) 何を失ったかが全然わかっていないんじゃないかと思う。僕らのときは、父親が権威をはっきりと失った。(中略) リービさんは大統領を失ったかもしれないし、父親をやっぱり失っているかもしれない。あなたの小説は、そういうものが非常にはっきりしているんです。はっきりさせるという以上に、それから逃れるために文章で書いてみる以外になかったんでしょう。

リービ：そうです。

安岡：今の文学をやっている連中は、それが何もないんじゃないか。自分に何が欠けているか、何が痛いのか、全くわかっていない。そのいらだたしさがあるね³¹

自己の喪失を意識し、そこから逃れようとするのが書くという行為であるならば³²、それは無から有を生み出そうとする作業に他ならない。この点において、喪失とは獲得の原点と言えないだろうか。リービは日本語を獲得することに成功した。彼自身の内側には中国語と英語が渦巻いているにも拘らず、「最初は、無意識だった。無意識のうちに、美しいと思って書いた。書きたいと思って、書いた³³」と外側にある日本語へ近づいて行った。だが決して彼は日本語以外を捨てたわけではなく、彼の作中では英語はもちろん中国語も当然のごとく登場する³⁴。特に中国語に関しては、存在しない単語を生み出すこともあ

³¹ 注6に同じ

³² 小森陽一は小説の創作について次のように述べた。「今問題にしていたような複数の言語と複数の国家と、そういう間で、自分が生まれた時代は拘束されて選べないことだし、親も選べないしという形で、ある動きをしてしまったことは、やっぱり小説でしか書けないのかな」座談会「言葉の闘争」(『群像』54巻1号、講談社、1999年1月号)に所収。

³³ リービ英雄『我的日本語』(筑摩書房、2010)に所収。

³⁴ 例えば『延安 革命聖地への旅』には延安の方言と英語が混ざった次のような文がある。「ハイ・ハ? ハイ・不・ハ? ハイ・ハ understand? Yes」(リービ英雄『延安・革命聖地への旅』岩波書店、2008)

る³⁵。このような一つに依らない複数性がリービの文章を特異なものにしている。

6 おわりに

以上において、リービ英雄文学を形作る「不在」と「非在」という喪失感について分析してきた。やはり越境文学の根底には基本的に、さまざまな形の欠損による喪失があるのではないだろうか。越境文学とは単に国境を越えた創作行為を指すものではなく、自らの所属する領域の境から弾き出された（もしくは飛び出した）者による存在証明の手段でもある。そして越境文学者にとっては「喪失」こそが、アイデンティティ形成の核となっている。だからこそ、その文学には「失われたもの」が観察できるのかもしれない。その内実は人によってさまざまだが、リービにおけるそれはおもに不在と非在でまとめることができる。

まず「不在」経験とは、離婚による親と故郷の喪失と、血筋による一族からの追放である。とくに故郷に関しては、「音としての故郷」という捉え方を提示している。従来において故郷とは一般的に心象風景を中核とする視覚による映像記憶として見做されてきた。つまり、近代文学は総じて故郷を心象風景という視覚的（映像）記憶として捉えてきているが、リービが示すように、実際においてはかなりの部分を聴覚にも依存しているのではないだろうか。記憶の中の言語（音）と現在使用している言語（音）が同一である場合には、記憶の中で音（言語）はあまり意識されないことがらなのかもしれない。それに対し、リービの故郷「模範郷」は異言語（音）が支配する「よその」の空間であった。だからこそ、聴覚的な疎外感を日常的に覚える機会が多く、それが「模範郷」の記憶の根幹を担う要素として顕著に現れているのだろう。このような「音としての故郷」は、複数の言語空間をその言語の話者として移動する越境文学のみに観察できる現象である可能性がある。

もう一つの経験が非在である。不在が過去に存在して現在に存在しないものであるとすれば、非在とは過去には存在していないが現在に存在しているものである。その「非在」に該当するものが日本語である。リービは自身のルーツに存在しない日本語を獲得して使用することで、不在を補っているとも言える。

³⁵ 例えば『仮の水』（2008）に「かれは返事をためらった。ただ日本、ルーベンと言いたかった。が、ルーベング日本の外国人、と答えた。」という描写がある。

日本語の多様性に関する異様な執着はこうした存在意識と密接に関わっているのかもしれない。このような非在のものへの執着は代替的に他領域への強烈な侵入であると同時に、そうした侵入行為によってその対象である日本語の蓋然性を広げていくのである。その根底に非在のものへの渴望があることは言うまでもない。そうした不在と非在への渴望がリービを文学に駆り立てていくのである。

付記：本論文は松浦光汰君の演習発表を論文化したものである。南はその指導に当たった。